

アムール下流域における土器出現期の研究 (1)

— オシノヴァレーチカ 12 遺跡の調査成果と課題 —

橋詰 潤^{*1}・内田 和典^{*2}

I. Y. Shevkomud^{*3}・M. V. Gorshikov^{*3}

S. F. Kositsyna^{*3}・E. A. Bochkaryova^{*3}

小野 昭^{*1}

要 旨

オシポフカ文化はアムール下流域における、世界の中でも最古級の土器の出現期である。それだけに留まらず本文化は更新世-完新世移行期における、環境変動と人類行動との相関関係を考察するために重要な研究対象でもある。そのため、本研究ではオシポフカ文化期の遺跡における人類行動の考察を最終的な到達目標とした調査を開始した。本論では、こうした問題について検討を行うための基礎データ収集を目的に実施した発掘調査および出土遺物の分析結果の概要について報告を行う。

明治大学黒耀石研究センターとハバロフスク州立郷土誌博物館は、2010年より日露共同調査隊を結成し、オシノヴァレーチカ 12 遺跡での新たな発掘調査を開始した。本遺跡はロシア極東地域のウスリー川とアムール川の合流地点近傍の段丘上に位置している。発掘調査の結果6層の堆積層が確認され、オシポフカ文化期の遺物は主に4層から5層直上に含まれていることが明らかとなった。遺物は、少量の土器と、300点をこえる石器が出土した。石器の内訳は両面調整の尖頭器、多様な形態のスクレイパー、斧形の石器、片面加工のツール類と剥片であり、本文化に一般的な細石刃と細石刃核は出土しなかった。今回の研究成果によって、今まで限定的であったオシポフカ文化期における遺跡の形成過程と石器石材の消費過程に関する情報について検討するのに必要な、基礎的なデータを得ることができた。しかし、本年の発掘面積は限定的なものでもあり、こうした研究課題について、今後の更なる調査の実施によって検討を続けていく必要がある。

キーワード：アムール川下流域，オシポフカ文化，更新世 - 完新世移行期，オシノヴァレーチカ 12 遺跡

1 はじめに

アムール川の下流域における土器出現期であるオシポフカ文化は、更新世終末にまでさかのぼる土器、両面調整の尖頭器や石斧などの存在といった類似点を有していることから、日本列島の縄文草創期の比較対象として注目されてきた。これまでに日露共同調査を含めた多くの

調査が行われ（加藤・赤井 2003, 長沼ほか 2003・2005, など）、本文化の内容についての理解が深まってきているといえる（長沼 2004）。さらに、それだけに留まらず本文化は、オールデストドリアス期から完新世の初頭にまで継続していたことが、遺跡出土炭化物などから測定された年代を校正した値を検討することによって明らかにされている（小畑 2003）。この時期は急激かつ大規模な温暖化と寒の戻りを繰り返した環境の激動期でもあっ

*1 明治大学黒耀石研究センター E-mail: meiji-ob@kokuyou.ne.jp

*2 首都大学東京大学院博士後期課程

*3 N. I. グロデコバ記念ハバロフスク州立郷土誌博物館

た(図2)。そのため、本文化の研究は、更新世-完新世移行期の環境変動に対する人類の適応行動理解のためにも非常に重要な位置を占める地域事例であるといえる。

しかし、寒冷地である当地域では土壌の発達スピードが遅いため土層堆積が薄く、さらに氷楔(アイスウェッジ)などの影響といった周氷河性の擾乱も度々発生することによって、遺物のセット関係把握が困難になっている場合も多い。さらに、遺物の取り上げや記録の方法などといった日露両国間の研究手法や、それらを生み出してきた研究背景の相違といった問題も存在する。そのため、人類の行動を読み解くために必要なデータの蓄積は十分に進んではいないというのが現状である。

こうした中、筆者らは2010年度より明治大学黒耀石研究センターとN.I.グロデコバ記念ハバロフスク州立郷土誌博物館の間で研究のための新たな協定を結び、日露共同調査を開始した(橋詰ほか2011)。本稿では、2010年9月に実施したロシア連邦ハバロフスク州のオシノヴァヤレーチカ12遺跡の発掘調査と出土資料の分析の成果を中心に、上記の研究課題に対する筆者らの取り組みの一端について成果を述べる。

2 アムール下流域の土器出現期について

2-1 研究史

アムール下流域の土器出現期であるオシポフカ(осиповская)文化の研究動向とその位置づけを整理して、本論における問題点とその課題の抽出を行いたい。なお、以下文中で初出のロシア語については、日本語表記の後にロシア語表記を記載している。

2-1-1 オシポフカ文化の位置づけ

オシポフカ文化の研究は、1926~1927年にM.M.ゲラシモフ(Герасимов)が、木葉形の槍先やスクレイパー、ナイフなどをハバロフスク市近郊の遺跡において発見したことから始まる(Деревянко 1983)。その後A.P.オクラドニコフ(Окладников)が、1935年にアムール下流域において総合学術調査を実施する中で、ハバロフスク市内のアムール川に架かる鉄橋の転轍手小屋付近(鉄橋遺跡)や、1960年代にはオシポフカ遺跡などの考古学

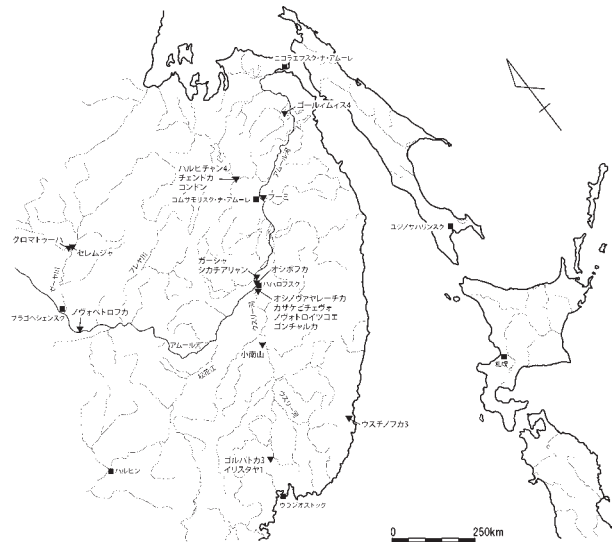
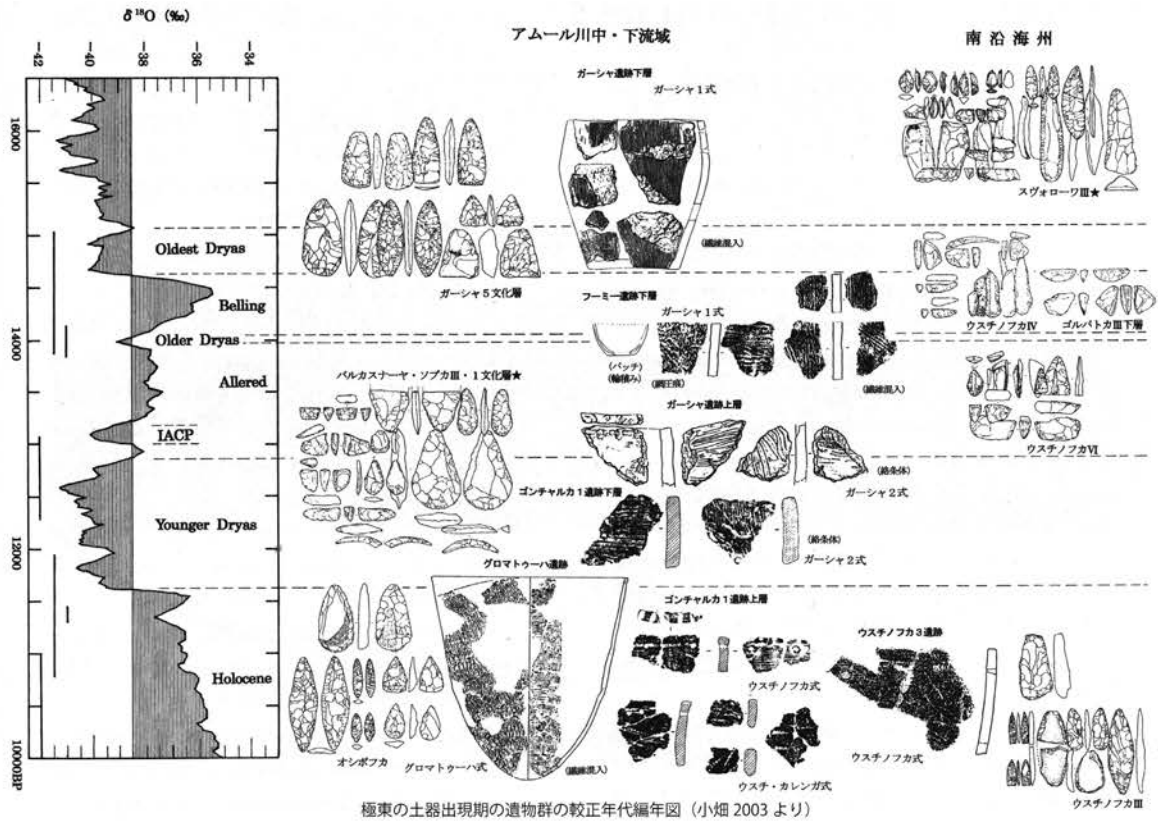


図1 極東の土器出現期前後の主な遺跡

調査を実施し、ゲラシモフが発見した資料を層位的に確認した(Окладников 1980)。オクラドニコフとA.P.デレビャンコ(Деревянко)らは、アムール下流域や極東周辺地域の研究調査の成果を加えて、オシポフカ文化に土器や磨製石器が伴わないことを根拠に「中石器時代」の位置づけを与えた(Окладников and Деревянко 1973)。

しかし、1975年から1990年まで継続的な発掘調査が実施されたガーシャ(Гарся)遺跡(Деревянко et al. 1992, 1993)において、オシポフカ文化の石器に土器が伴って出土することが確認されたことにより、当文化の位置づけが変更されることになる。当遺跡から採集された炭化物試料は、調査区I下層の粘土層中から $12,960 \pm 120$ YBP、調査区IVの地山直上の砂質粘土層中から $10,875 \pm 90$ YBP、 $11,340 \pm 60$ YBPの年代値が得られた。さらにフーミ(Хумми.)遺跡の発掘調査によってもガーシャ遺跡の調査結果を追認するように、オシポフカ文化の石器に土器が伴い、 ^{14}C 年代値も下層で $13,260 \pm 100$ YBP、上層で $10,345 \pm 110$ YBPが得られた(Лапшина 1999)。

ガーシャ遺跡とフーミ遺跡での研究成果によって、①オシポフカ文化に ^{14}C 年代値が与えられたこと、②当文化の石器群と共に土器が出土したこと、③石器群の中に研磨技術(局部磨製)が存在していることが確認されたこと、などによって中石器時代から初期新石器時代へと位置づけが変更されることになった(Медведев 1995など)。



極東の土器出現期の遺物群の較正年代編年図 (小畑 2003 より)

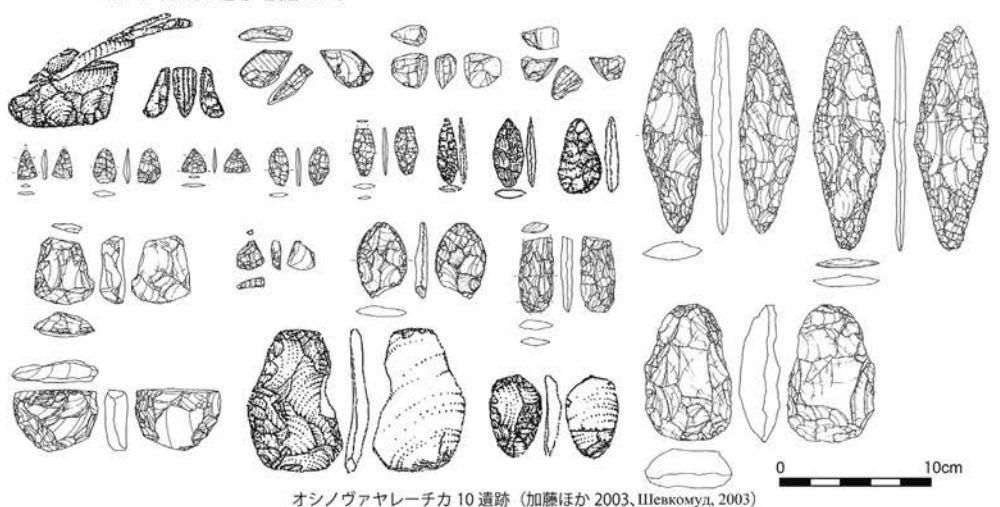
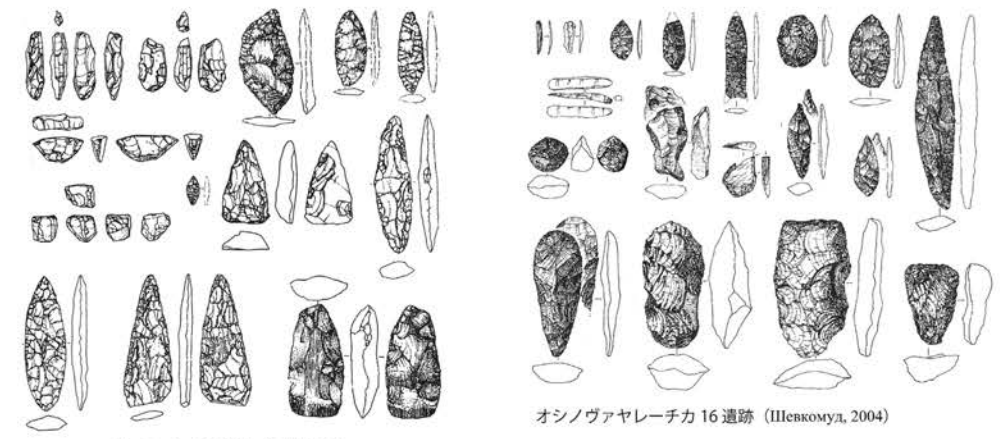


図2 オシボフカ文化期の石器と土器

表 1 アムール下流域の土器出現期前後の¹⁴C年代測定値 (Шевкомуд *et al.* 2009 をもとに一部改変)

番号	遺跡名 (日本語)	遺跡名 (ロシア語)	調査年度	試料	ラボ番号	¹⁴ C測定値 (YBP)	考古学的文化
1	ゴールィムイス 4 遺跡	Голый Мыс	1991	炭化物	AA-36277	12,925±65	後期旧石器
2	ゴールィムイス 4 遺跡	Голый Мыс	1991	炭化物	AA-36278	12,680±65	後期旧石器
3	ゴールィムイス 4 遺跡	Голый Мыс	1991	炭化物	AA-36279	12,610±60	後期旧石器
4	ゴールィムイス 4 遺跡	Голый Мыс	1991	炭化物	AA-36281	12,360±60	後期旧石器
5	ガーシャ遺跡	Гася	1980	炭化物	ЛЕ-1781	12,960±120	オシポフカ文化
6	ガーシャ遺跡	Гася	1987	炭化物	GEO-1413	11,340±60	オシポフカ文化
7	ガーシャ遺跡	Гася	1987	炭化物	AA-13393	10,875±90	オシポフカ文化
8	フーミ遺跡	Хумми	1992	炭化物	AA-13392	13,260±100	オシポフカ文化
9	フーミ遺跡	Хумми	1992	炭化物	AA-13391	10,375±110	オシポフカ文化
10	フーミ遺跡	Хумми	1997	炭化物	AA-23130	10,540±70	オシポフカ文化
11	フーミ遺跡	Хумми	1997	炭化物	СОАН-3826	12,150±110	オシポフカ文化
12	ゴンチャルカ 1 遺跡	Гончарка 1	1995	炭化物	LLNL-102169	12,500±60	オシポフカ文化
13	ゴンチャルカ 1 遺跡	Гончарка 1	1995	炭化物	AA-25437	12,055±75	オシポフカ文化
14	ゴンチャルカ 1 遺跡	Гончарка 1	2001	炭化物	Тка-13005	11,340±110	オシポフカ文化
15	ゴンチャルカ 1 遺跡	Гончарка 1	1995	炭化物	LLNL-102168	10,590±60	オシポフカ文化
16	ゴンチャルカ 1 遺跡	Гончарка 1	2001	炭化物	ТКа-13007	10,550±80	オシポフカ文化
17	ゴンチャルカ 1 遺跡	Гончарка 1	1996	炭化物	AA-25438	10,280±70	オシポフカ文化
18	ゴンチャルカ 1 遺跡	Гончарка 1	1996	炭化物	AA-25439	10,280±70	オシポフカ文化
19	ゴンチャルカ 1 遺跡	Гончарка 1	1995	炭化物	GaK-18981	9,890±230	オシポフカ文化
20	オシノヴァヤレーチカ 16 遺跡	Осиновая Речка 16	2000	炭化物	AA-60758	11,365±60	オシポフカ文化
21	オシノヴァヤレーチカ 16 遺跡	Осиновая Речка 16	2000	炭化物	ТКа-12951	11,140±110	オシポフカ文化
22	オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡	Осиновая Речка 10	2001	炭化物	ТКа-12954	10,760±150	オシポフカ文化
23	アムール 2 遺跡	Амур 2	2001	炭化物	ТКа-12952	4,5670±980	—
24	ノヴォトロイツコエ 3 遺跡	Новонроицкое 3	2003	炭化物	СОАН-5477	8,175±190	—
25	ノヴォトロイツコエ 3 遺跡	Новонроицкое 3	2003	炭化物	AA-60755	130±35	—
26	オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡	Осиновая Речка 10	2001	炭化物	BA-01181	5,250±50	—
27	オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡	Осиновая Речка 10	2001	炭化物	ТКа-12953	5,950±80	—
28	オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡	Осиновая Речка 10	2001	炭化物	ТКа-12955	5,240±140	—
29	シカチ・アリヤン遺跡 (下層)	Сикачи-Алян (нижний пункт)	1970	フミン酸	МГУ-410	6,900±260	—
30	フーミ遺跡	Хумми	1992	炭化物	ГИН-6945	7,760±120	—
31	フーミ遺跡	Хумми	1997	炭化物	СОАН-3583	12,425±850	—
32	フーミ遺跡	Хумми	1992	炭化物	AA-13394	42,800±1,900	—

2-1-2 オシポフカ文化の分布範囲

その後もオシポフカ文化に関連する資料は蓄積され、その分布範囲を把握できるようになった。現在のところ当文化は、アムール下流低地帯を中心に、南は黒龍江省饒河市小南山遺跡 (黒龍江省博物館 1972)、北はエヴォロン (эворон) 湖周辺遺跡群までの南北約 500 km の範囲にある (図 1)。特にハバロフスク市周辺では、オシポフカ文化期の遺跡集中が三地域で確認される。一つ目

は、ハバロフスク市から北東約 40 km のガーシャ遺跡のあるマルィシェヴォ村からシカチ・アリヤン村周辺、二つ目は標式遺跡となったオシポフカ 1 遺跡が存在するヴォロネジュスコエ (волонезское) 岬付近、三つ目は、ハバロフスク市から南西約 15~20 km にあるコルサコフ村からノヴォトロイツコエ村付近である。当地域はヘハツィル山脈からの扇状地に位置することから、ヘハツィル・ゲオアルヘオロギー地区 (Хехцирский георхеоло-

гический район)として設定され、オシポフカ文化期の古環境復元のための調査が実施されている(Шевкомуд *et al.* 2001)。その結果当地区は、更新世終末期から完新世初頭期において、アムール川の水位が現在よりも5~10 mほど高く、現在のアムール低地帯の大半が冠水し、ヘハツィル山脈を中心とした一帯は四方を広大な湖に囲まれた島または半島であった可能性が指摘されている(Шевкомуд 2002)。

近年、当地区では、ロシア側と日本や中国などとの間で国際共同調査が展開されている。成果の一部が公表されているものには、ゴンチャルカ(Гончарка) 1遺跡(シェフカムート 1997, 長沼ほか 2003)、ノヴォロイツコエ(Новотроицкое) 3遺跡(Малявин ほか 1999)、同 10遺跡(長沼ほか 2005)、オシノヴァヤレーチカ(Осиновая речка) 10遺跡(加藤・赤井 2003, Шевкомуд 2003)、同 16遺跡(Шевкомуд 2004)などがある。こうした調査成果をもとに当文化の輪郭が浮かびあがりつつある。

2-1-3 オシポフカ文化の内容

1) 遺構

オシポフカ文化期の遺構としては住居址や墓がある。住居址はノヴォロイツコエ 10遺跡などにおいて痕跡が薄いながらも確認された。当遺跡では、調査区外にまでびる平面が不整形な竪穴住居状の遺構が検出されている。報告者らは、住居址の可能性について慎重とすべきとしつつ、遺構内から多量の人工遺物や炉跡が確認されたことから、何らかの人類活動と関連した可能性を指摘している¹⁾(長沼ほか 2005)。

また、図面等が公表されていないため、詳細は不明であるが、ゴンチャルカ 1遺跡では墓が検出されている(Шевкомуд 1996)。

2) 遺物(図 2)

石器

石器組成の一般的なあり方は、細石刃核と多様な両面調整石器を主体とし、搔器や削器、石斧などが伴う。細石刃核は、湧別技法によるものと、小形の円礫を素材に簡素な打面形成が施され細石刃を剥離するものの二種類がセットとなる。

両面調整石器は、尖頭器、石斧、石鏃など多様な形態があり、局部磨製のものも含まれる。また「手斧=スクレブラ状石器」と呼称される両面調整石器がある。オシポフカ文化を特徴づける石器の一種であるが、器種認定に至るプロセスが感覚的なものであり、この器種として分類されているものの中には各種の未製品や石核、搔器、石斧などが含まれている(長沼 2004)。他にも石錘の可能性のある溝をもつ円礫や、軟玉製管玉や双頭男根状石製品などもオシポフカ文化に帰属すると考えられている²⁾。

また当文化で利用される主な石材は、珪質頁岩や流紋岩などで構成されており、ごく稀に黒曜石の小破片が確認されることがある。

3) 土器(図 2)

オシポフカ文化の土器には、条痕文や絡条体圧痕文、円孔文、櫛目ジグザグ文などがある。これらの土器はパッチワークによって成形されているものがあるとされる(栗島 1999)。しかし、当文化の土器は、小破片で出土することが多く、保存状態がきわめて悪いため、器形や文様、成形技法がはっきりとしないことが多い。当文化の石器研究と比較して、土器研究が進展しない原因の一つである。こうした状況下において、梶原洋は、極東・東シベリアの「最古の土器群」を検討し、出現期の土器を7つの型式に設定して編年案を提示した(シェフカムート 1997の梶原解説, 梶原 1998)。この「最古の土器群」は、それぞれ表面の文様に違いがあるものの、内面の調整には、すべて絡条体を横に引いたかと思わせる条痕文をもつという特徴が共通する。

土器利用については、主に食物調理とあく抜き説を有力な仮説としている日本列島の出現期土器の理解に対し、アムール下流域を含めた極東・東シベリアでは、調理具としての土器に加え、接着剤としてのニカワや、油製造など、多目的に用いられた可能性が指摘されている(梶原 1998)。

2-1-4 オシポフカ文化の多様性と存続期間

アムール下流域においてオシポフカ文化以前の状況ははっきりとしない。現在のところ後期旧石器段階の遺跡はゴールィムイス(Гольий мыс) 4遺跡のみである。当遺跡は、大形の石刃製石器と石刃石核が出土しており、

両面調整石器や細石刃核、土器が伴わないことから、オシポフカ文化よりも古い上部旧石器として評価された(Шевкомуд and Като 2002)。表1は2009年現在までに得られた¹⁴C年代値の一覧であるが、これを見ると当遺跡で得られた年代値は、オシポフカ文化の数値年代とほぼ重複することがわかる。現時点では比較できる類例がないため、オシポフカ文化の変異幅や年代的に併行する異系統石器群などとしての可能性(長沼2004)や、後期旧石器と初期新石器の一部共存の可能性(Kuzmin and Shevkomud 2003, 加藤2006)などがあり、今後の調査に委ねられる課題の一つである。

このようにオシポフカ文化の石器群や土器群から提示される多様性とその存続期間や編年的細分の問題は、数値年代においても同様の傾向にある。表1を参照するとオシポフカ文化は、およそ13,000 YBP~10,000 YBPにまで及んだ長期間の文化であることがわかる。I. Ya. シェフカムードは、ゴンチャルカ1遺跡において資料群が層位的な差異をもって出土していることと、それぞれの層位から得られた年代値が12,000 YBPと10,000 YBPの二つのピークをもつことなどを考慮して、オシポフカ文化を前期と後期とに二時期区分することを提示している(Шевкомуд 1998, Kuzmin and Shevkomud 2003)。

2-2 問題点と課題

当該地域は、堆積層が薄いことや後世の土地利用による攪乱が大きく影響することから、石器群と土器の共伴関係や年代決定の手続きなど、資料間の相関性を読み取る上で課題とすべき問題が数多く残される。また資料提示の方法にも報告者のバイアスが多分にかかる場合があり、遺跡の詳細な情報開示も求められる。

当該期の人類の移動や定住を含めた居住形態などの適応行動の変化を理解する上で、遺構や人工遺物について個別に検討を進める一方で、これらの相関性や遺跡周囲の生態環境も含めた研究を進める必要がある。

こうした問題点を踏まえた上で、本論で紹介するオシノヴァレーチカ12遺跡は、遺跡から得られる基礎的な情報をできる限り回収し、一遺跡内での多角的な考古資料の分析を進めることを主眼として実施した。

3 オシノヴァレーチカ12遺跡の概要

3-1 調査経緯と遺跡の位置

オシノヴァレーチカ12遺跡は、ロシア連邦ハバロフスク(хабаровский)地方ハバロフスク市オシノヴァレーチカ村に位置している(図3)(GPSデータ: N48°20'10.2", E134°54'17.2")。遺跡は、ウスリー(уссури)川とアムール川支流の合流地点にあり、流水の浸食作用を受けた小谷の岬状先端に立地する。

ヘハツィル山脈からの扇状地の末端が、アムール支流の浸食を受けて形成された台地上地形の崖線に沿って、現アムール川水面高15~45 mに、オシポフカ文化期の遺跡が58箇所以上確認されている³⁾。この内オシノヴァレーチカ遺跡群では、オシポフカ文化から中世までの遺構・遺物が20箇所ほど存在している。

2010年度調査は、I. シェフカムードによって2000年度に試掘調査が行われ、オシポフカ文化期の遺物が確認されている良好な地点を対象に、発掘調査を実施した。調査はN.I. グロデコバ記念ハバロフスク州立郷土誌博物館と明治大学黒耀石研究センター間で協定が結ばれて行われた。

発掘調査は、2010年9月7日~9月13日までの期間に、日本側から内田が、ロシア側からはI. シェフカムード、M. ガルシュコフ、S. コスチナ、E. ボチカリョバラが参加して行った。資料整理は、同年10月29日~11月8日まで、橋詰と内田が中心になって、シェフカムードと小野の指導を受けながら実施した。

3-2 層位と遺物分布

2000年度にI. シェフカムードは、当遺跡の3箇所にテストトレンチを設定して試掘調査を実施した。その内のテストトレンチNo.3(50×50 cmのグリッド)に近接して2010年度調査区(1 m×1 mの小グリッドを6箇所、全体で3×2 mのグリッド)を傾斜面に沿って設定した(グリッドの配置は図4を参照)。

今回の発掘では調査区内に基本層序として6層を確認することができた(図4)。堆積土層の特徴は以下の通りである。1層:表土層, 2層:褐色シルト層, 3層:黄褐色シルト層, 4層:にぶい黄褐色の小礫混じりのシ

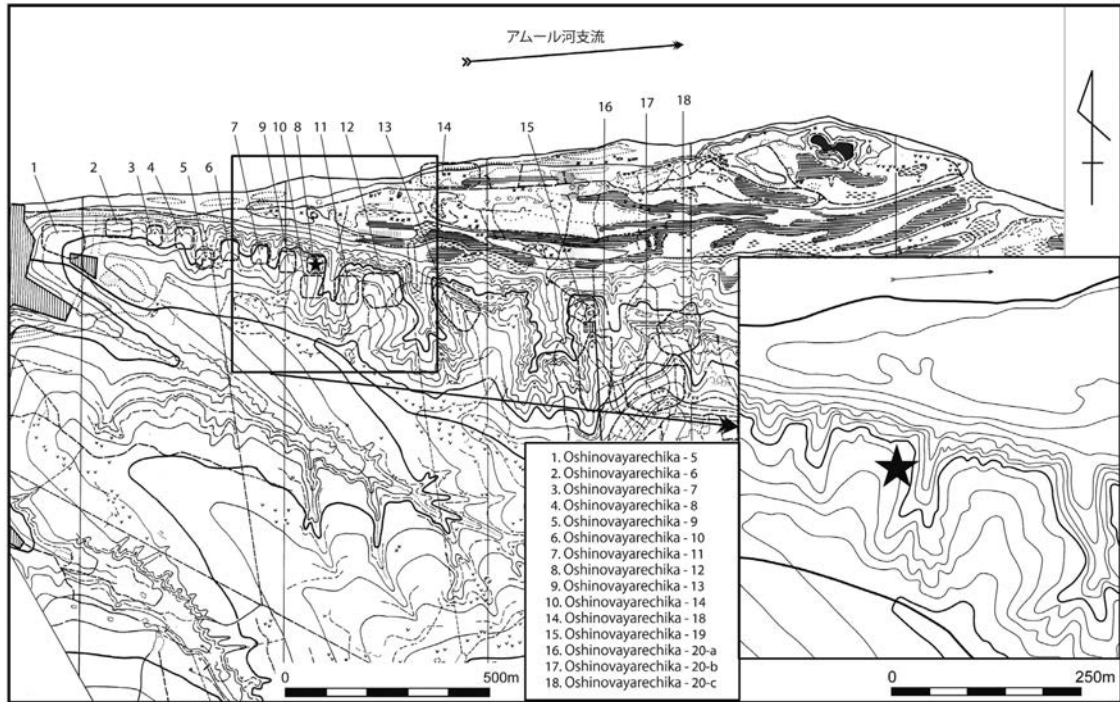


図3 オシノヴァレーチカ 12 遺跡の位置

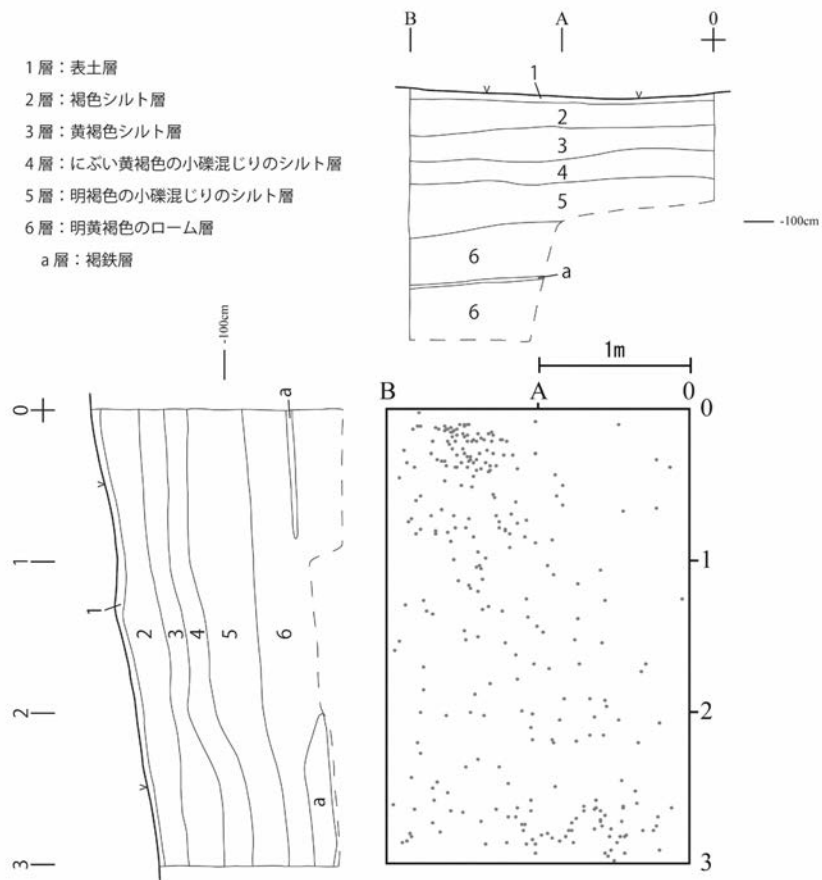


図4 層位と出土遺物の全層位、全点分布図

表2 出土石器の器種組成

尖頭器	打製石斧	搔器	削器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	加工痕のある礫	石核	剥片	計
4 (1.3%)	1 (0.3%)	5 (1.6%)	5 (1.6%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	1 (0.3%)	2 (0.7%)	285 (93.1%)	306

※ ()内の％は全出土石器 306 点中に占める割合を示す
 ※※ 削器のうち2点は折れ面で接合する

ルト層, 5層: 明褐色の小礫混じりのシルト層, 6層: 明黄褐色のローム層となる。オシボフカ文化の遺物は、主に4層から5層直上にかけて出土している。また、5層は褐鉄鉱を多く含んでいる。6層以降では遺物は認められず、褐鉄鉱によるラミナ状変色部(a層)が水平状に繰り返し堆積している。

出土遺物のすべては3次元座標によってその出土位置を記録した⁴⁾。本発掘区では、ほぼ全面的に遺物が出土しており、特にB-1区では石器が水平状に重なり合いながら出土した集中部が認められた。A-1区にも分布密度はやや散在的になるが、石器のまとまりが認められた。B-3区では調査区外にまで及んで土器片が出土したが、表裏面とも著しく磨滅しており、遺存状態がきわめて悪い。また、本発掘区では遺物は基本的に土層の堆積に対して水平になるように出土するという特徴が観察された。なお、本発掘区では、良好な年代測定試料を得るために炭化物の出土に注意をはらったが、今回の調査では明瞭な炉跡や炭化物集中を検出することはできなかった。

3-3 遺物 (図5~9)

ここでは今回の発掘調査で出土した資料について概要を述べていく。なお、本遺跡では先述したように2000年に試掘調査が実施されている。その際の出土資料についても既に観察を行っているが、基本的には器種組成、石器の石材構成などの内容は今回の資料と共通している。調査年度の違い以外には両者を区分する理由は存在しない。しかし、試掘という性格上今回の調査とは出土遺物の回収や記録の方法の点で異なっている。そのため、本論では分析対象を2010年度調査出土資料に限定し以下の記述を進めていく。

3-3-1 石器

今回の発掘調査では礫片などを除くと、合わせて306

点の石器が出土した(表2)。本稿では今回の出土石器の①器種分類の結果と使用された石材の特徴、さらに本遺跡における石器製作に関する検討結果について概要を示す。加えて、本遺跡の形成過程を示唆する情報と考えられる、②石器の表面状態について以下に述べる。

1) 器種組成と石器石材

今回の再分類は、今後、より広範囲の石器群との比較の際にも適用可能な基準を整備することも目的としている。そのため、既存の分類を再検討した上で、新たな分類基準を設定した。なお、現状では研究者間で器種の分類基準や名称が異なっていることを考慮し、今回用いる分類基準について明示しておくこととした。その際、再現性のある基準による整理・記載を行うことを目的に、既存の定義(加藤・鶴丸1991など)を参考にしながら、特に二次加工のあり方を基準として分類を行った。分類の基準は以下の通りである。

- ・**尖頭器**: 両側縁からの二次加工によって尖頭部が作り出された石器。
- ・**打製石斧**: 両面あるいは片面からの剥離によって、断面形が凸レンズ形、または楕円形に整形された素材の長軸の一端に刃部を作出したもの。
- ・**搔器**: 素材剥片の端部に急角度の二次加工が施されたもの。
- ・**削器**: 素材側縁の長さの1/2以上に二次加工が施されたもの。
- ・**二次加工のある剥片**: 剥片を素材とし、側縁の長さの1/2未満に二次加工が施されたもの。搔器や削器に比して二次加工は不規則である。
- ・**微細剥離痕のある剥片**: 素材側縁に微細な剥離痕を有している剥片。
- ・**加工痕のある礫**: 剥離面の大きさ、規則性、打面と作業面の角度などから、刃部作出のために剥離が施された礫と判断したものを本器種に分類した。
- ・**石核**: 石器表面が、ネガティブな剥離面や礫面、節

表3 出土石器属性表(図化したもののみ、剥片は除く)

図 No.	グリッド	プラスト (人工層位)	取り上げ No.	器 種	石材(橋詰判断)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
1	A-2	4	005S	尖頭器	頁岩(暗灰)緻密	7.3	1.9	1.5	22.0	
2	B-3	5	048S	尖頭器	頁岩(暗灰)緻密	3.8	2.1	0.6	5.6	表裏激しく摩耗
3	A-3	6	001S	尖頭器	頁岩(暗灰)緻密	5.4	2.1	0.6	6.1	表裏激しく摩耗
4	A-3	5	025S	尖頭器	頁岩(暗灰)緻密	3.7	1.5	0.7	3.1	
5	B-1	6	041S	搔器(片面調整)	頁岩(暗灰)緻密	8.3	3.8	1.9	49.5	
6	B-3	5	035S	搔器(半両面調整)	頁岩(暗灰)緻密	5.5	3.9	1.2	26.5	
7	B-3	6	095S	搔器(半両面調整)	頁岩(暗灰)緻密	5.1	3.3	1.4	28.9	彫刀面あり
8	B-1	5	013S	搔器(両面調整)	頁岩(暗灰)緻密	6.1	4.1	1.1	25.8	
9	B-2	2	002S	搔器(両面調整)	頁岩(暗灰)緻密	5.7	3.0	1.1	17.2	
10	B-1	6	012S	削器	頁岩(暗灰)緻密	9.7	7.0	1.3	74.4	
11	B-3	3	022S	削器	頁岩(暗灰)緻密	4.0	2.0	0.4	3.3	表面摩耗
12	B-3	3	019S	削器	頁岩(暗灰)やや粗	8.0	2.8	0.8	21.4	表裏磨耗
13	B-2	4	041S	削器	チャート	5.7	4.1	0.6	5.5	2点が折れ面で 接合
			054S							
14	A-3	5	026S	加工痕のある礫	頁岩(黄褐色)緻密	5.7	4.2	1.1	21.6	
15	B-2	3	001S	微細剥離痕のある剥片	碧玉	3.5	2.8	0.7	4.9	
16	A-3	2	001S	微細剥離痕のある剥片	頁岩(暗灰)緻密	4.7	3.5	0.9	8.2	
17	B-1	6	094S	二次加工のある剥片	頁岩(暗灰)緻密	5.2	4.5	0.9	21.0	
18	B-2	4	040S	打製石斧	粘板岩	7.9	3.6	1.2	37.9	
19	A-3	4	019S	石核	頁岩(黄褐色)緻密	5.3	5.1	4.3	61.1	
20	A-1	4	002S	石核	頁岩(暗灰)やや粗	3.0	7.3	3.9	100.0	

理面で構成されている石器。最終剥離面がネガティブな剥離面であり、剥離面の大きさ、規則性、打面と作業面の角度などからそれらの剥離面が刃部作出のためとは判断できないものを本器種とした。

これらの基準によって、今回出土した石器を再分類した結果が表2である。尖頭器4点、打製石斧1点、搔器5点、削器5点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片2点、加工痕のある礫1点、石核2点、剥片285点という構成である。削器は2点が折れ面で接合しているので、実際には5点、4個体である。細石刃および細石刃核や、磨石や敲石などの大形の礫石器は今回の発掘資料には含まれていなかった。

以下に、二次加工が施されている石器(いわゆるツール)と微細剥離痕のある剥片(図5~8,表3)の全点、さらに一部の剥片について実測図の提示と観察結果の記載を行う。

・尖頭器(1~4):図5-1⁵⁾は柳葉形の両面調整尖頭器

である。右側面⁶⁾に折れ面と推定される厚みを残している。この折れ面に対しても剥離が施されているが、厚みの除去に失敗し放棄されたと推定される。2と3も柳葉形の両面調整尖頭器である。両資料とも正面、裏面とも著しく摩耗しており稜線の読み取りが困難である。また、正面と裏面には点状に褐鉄鉱の付着が認められる。4は尖頭器に分類したが、より正確には両面調整の石器の破片である。調整時に両面調整の石器縁辺が折れ、発生したものと推定される。

・打製石斧(18):扁平な剥片を素材とし、両側縁に節理面を配置し二次加工を施すことによって、楕円形の断面が作出されている。折れのため刃部の形状は不明である。

・搔器(5~9):分厚い縦長剥片を素材とした片面調整のもの(5)、半両面調整のもの(6,7)と両面調整のもの(8,9)が含まれる。半両面調整のものと両面

調整のものは上部に向かってすぼまっていく尖頭状の平面形が似通っている。さらにその中に、刃部の平面形が直線的なもの(6)と丸みを帯びるもの(8, 9)がある。また、7は刃部方向から両側縁に彫刀面が作出されている。なお、9は平面形状からは木葉形の尖頭器に分類可能だが、下端に搔器の刃部に認定可能な鈍角の二次加工が明瞭に認められるため搔器とした。

- **削器(10~13)**：大形で幅広の剥片を素材としたもの(10)、縦長剥片素材のもの(11, 12)やチャート製のやや幅広の剥片素材のもの(13)がある。10は素材剥片の背面が多方向からの剥離面によって構成されており、両面調整の石器製作の際に作出された剥片が素材として用いられていると判断される。11, 12には器体に顕著な摩耗が認められる。特に12は正面、裏面ともに稜線の判断が困難な状態にまで摩耗が進んでいる。13は2点が折れ面で接合している。
- **二次加工のある剥片(17)**：素材の縁辺に不連続な二次加工が施されている。素材剥片は切子打面を有し、背面が多方向からの剥離面で構成され、さらに剥離の開始部(裏面)にリップ(山田・志村1989)が認められ、両面調整の石器製作に伴って生じた剥片が用いられていると考えられる。また、平坦な礫面が観察され、円磨の進んでいない礫が素材として用いられたと想定される。
- **微細剥離痕のある剥片(15, 16)**：15は暗赤褐色の碧玉を用いている。礫面の状態から円礫~亜円礫が素材と推定される。16は素材剥片の背面が多方向からの剥離面によって構成されており、両面調整の石器製作に伴い生じた剥片が用いられたと考えられる。
- **加工痕のある礫(14)**：黄褐色の緻密な頁岩の亜円礫が素材である。自然礫の状態で尖頭形を呈していた素材に、急角度な二次加工を施すことによって石錐状あるいは抉り入り削器状の形態となっている。
- **石核(19, 20)**：19は小形の亜円礫の平坦面を打面に小さな剥片の剥離が行われている。なお、19および14に用いられている石材は、オシボフカ文化

期に広く細石刃に用いられている石材である(長沼ほか2003)。20は両面加工が施された素材に対して、器体を断ち割るように剥離が行われている。本資料に観察される礫面も17と同様に平坦であり、円磨の進んでいない礫が用いられたと想定される。本遺跡出土の石核は数が少なく、さらに10のような大形の剥片石器に素材を供給できるサイズを満たしていない。

上記してきたいわゆるツールの他に今回実測図を掲載した21~23は、本遺跡における石器製作についての情報を提供している資料である。まず21の接合資料は本遺跡内でチャートの剥片剥離が行われた可能性を示す。また、22は裏面(腹面)の下部に両面調整の石器の縁辺を大きく取り込んでいる剥片である。両面調整の石器を製作している際にウーツルパッセ(山田・志村1989)が生じ、打撃を加えたのとは反対側の側縁を剥片の末端に取り込んでしまったものと考えられる。そして、23の接合資料は背面構成や、切子打面を有すること、そして、剥片の腹面の剥離開始部にリップを有することなどから、両面調整の石器製作が本遺跡で行われたことを示している。また、本資料に残る礫面も円磨の進んでいない平坦な礫面である。

今回図示した資料は13~15と18, 19, 21を除いて暗灰色の頁岩で占められており、この傾向は図示資料以外でも変わらない。正確な集計は未了だが、9割以上が同様の石材で占められている。これらの石材を用いた石器には、平坦な礫面や切子打面、リップを有し、背面が多方向からの剥離面によって構成されるなどといった特徴をもつ例が一定量存在する。これらのことから、本遺跡では円磨の進んでいない暗灰色頁岩の礫を用いた両面調整石器のリダクションが主に行われ、その他にわずかに14, 15, 19のような円礫を用いたリダクションが行われたと考えることができる。

2) 石器の表面の状態

上記してきた石器石材や石器製作にかかわる情報の他に、今回の観察の結果、石器の表面に摩耗によると思われる光沢や、褐鉄鉱の付着を見出すことができた。これらの情報の集計は未了であるが、本遺跡の形成過程を考察する上で重要な情報を提供するものと考えられるため、

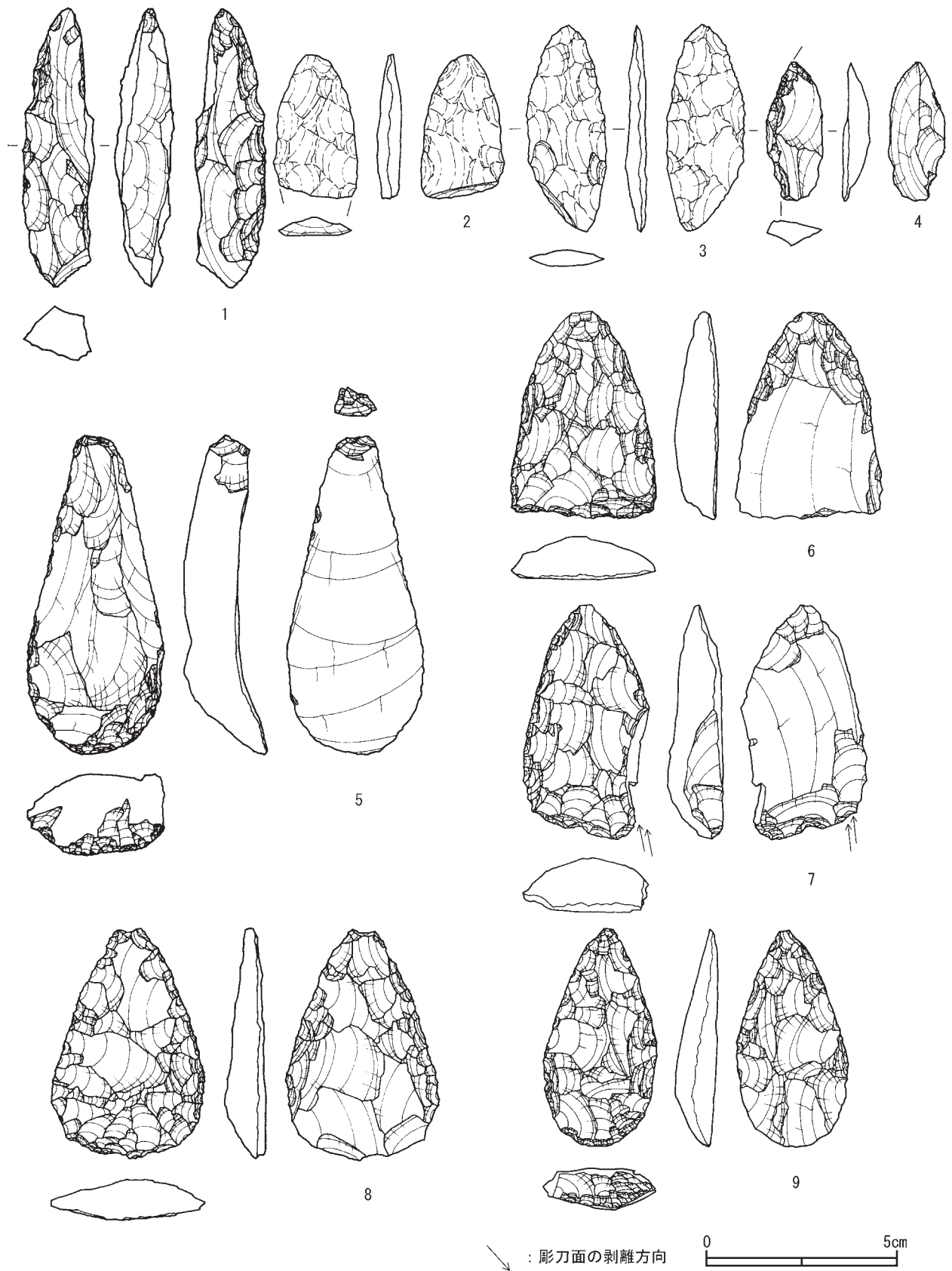


図5 出土石器(1)

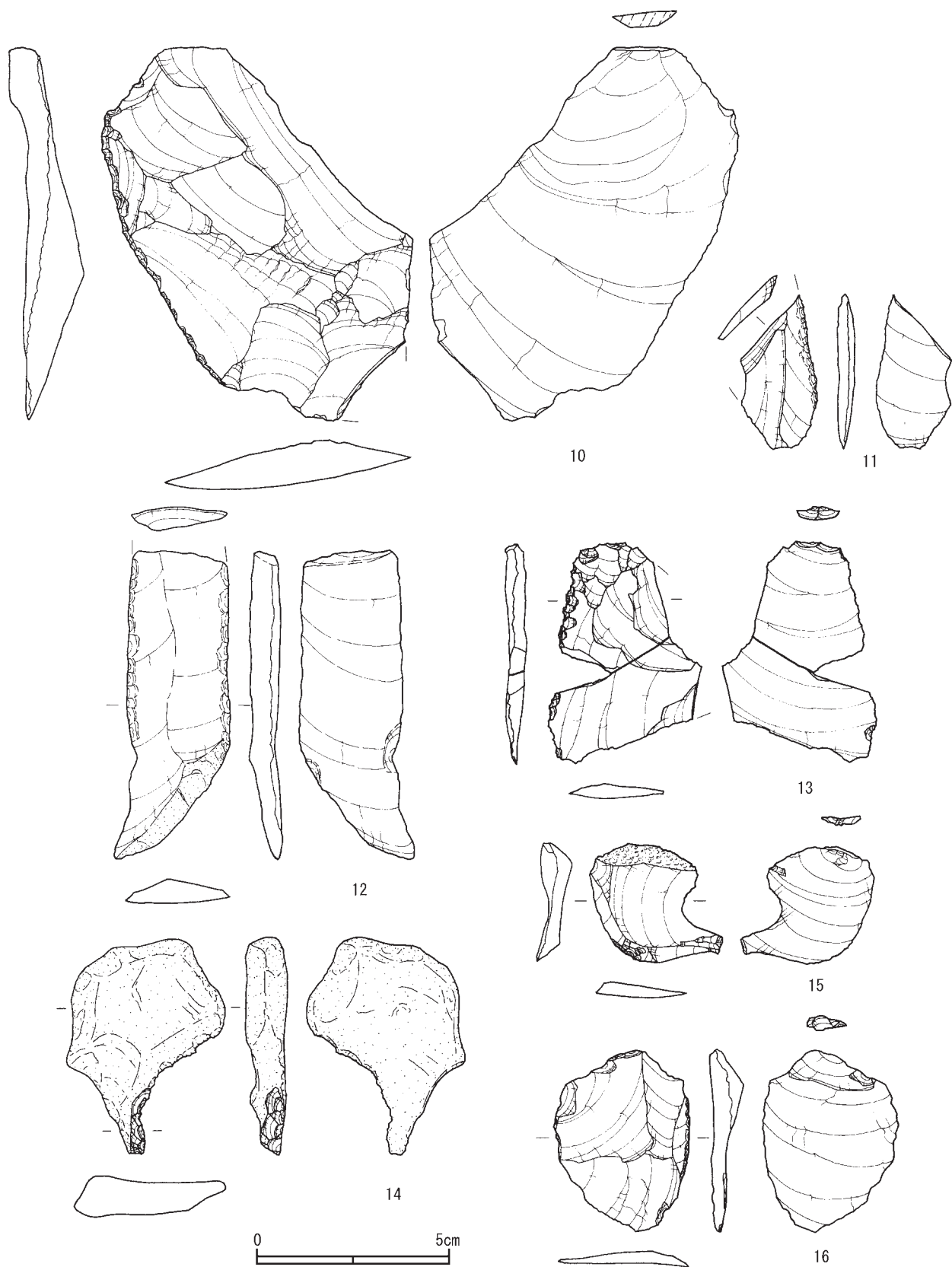


图6 出土石器(2)

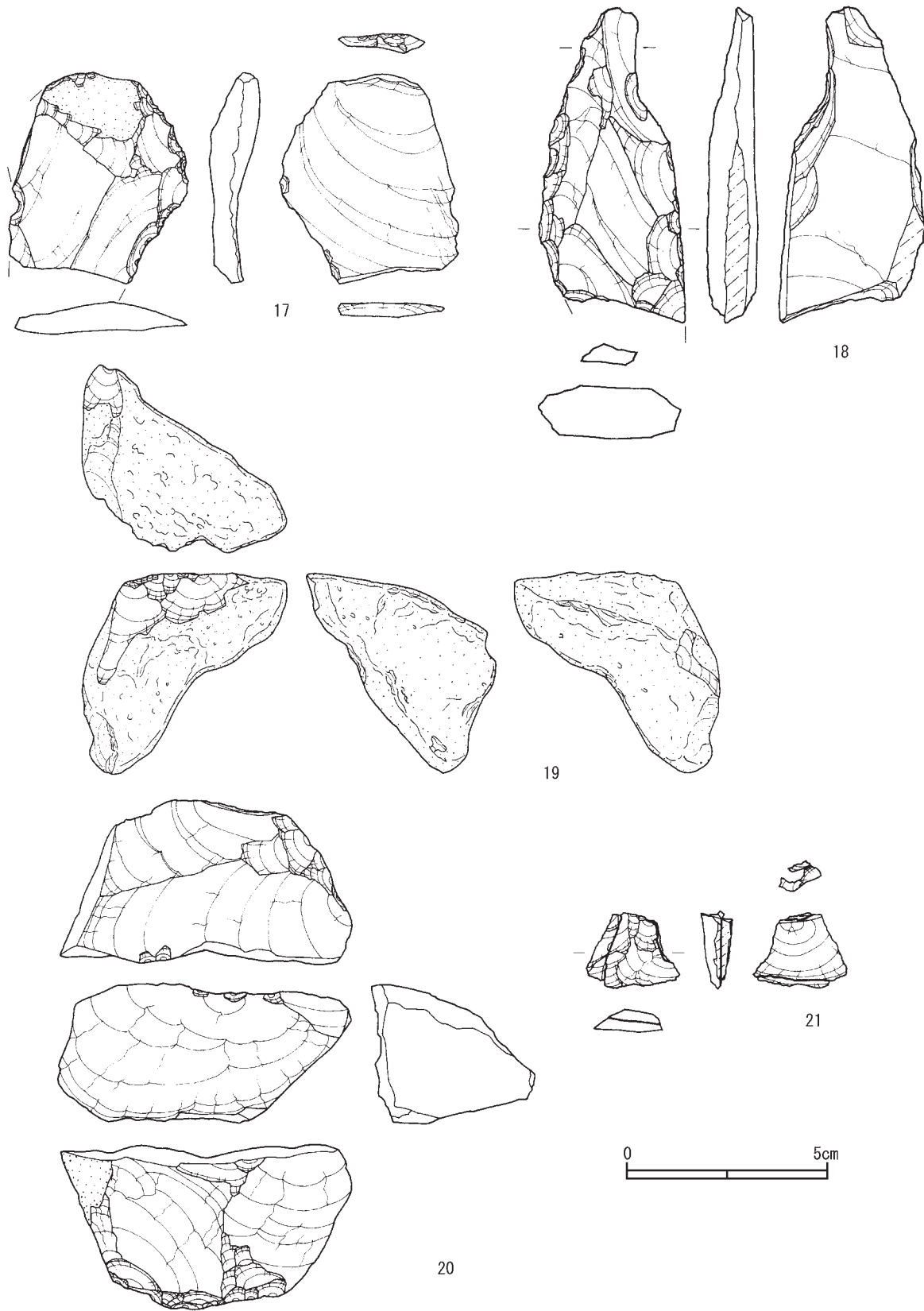


図7 出土石器 (3)

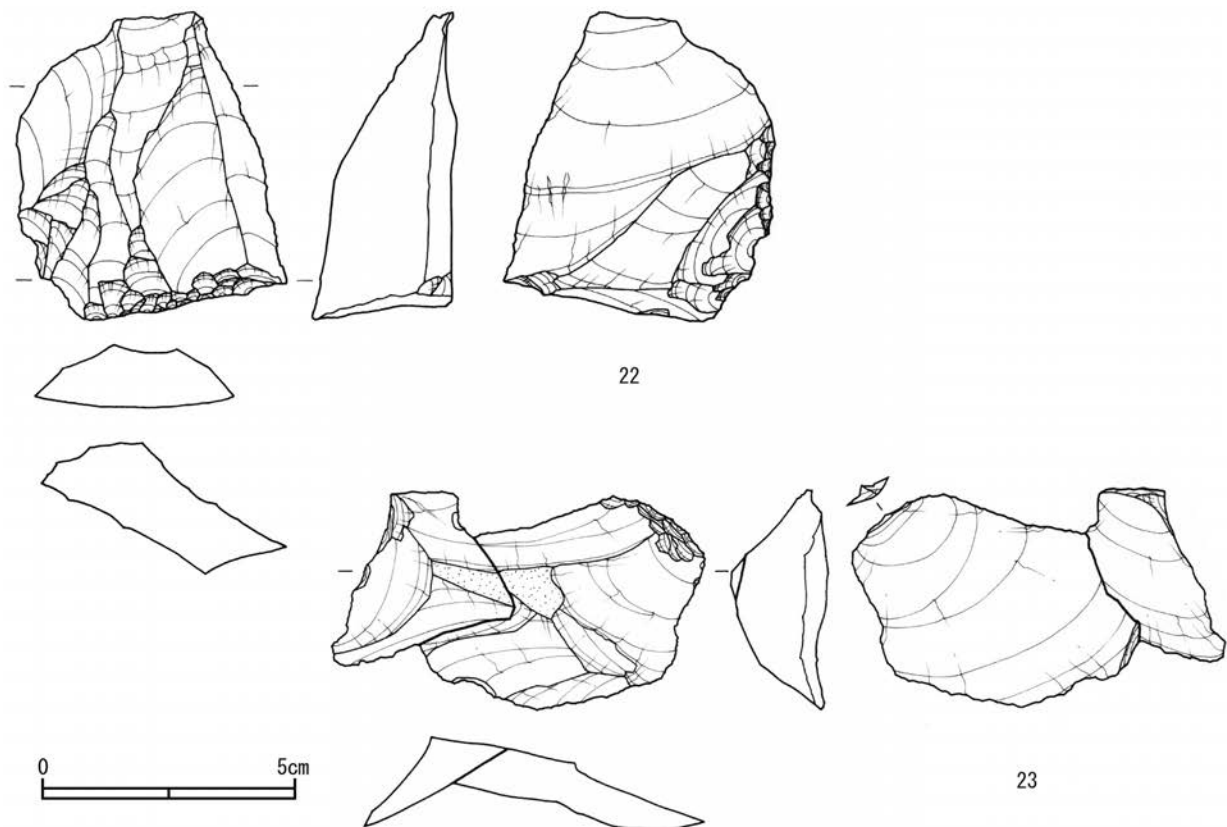


図8 出土石器(4)

予察も含め以下に概要を述べる⁷⁾。

本遺跡出土石器は、表面に摩耗が認められる資料が多く、2や3のように稜線がほとんど判別不能となっているものも存在する。このように顕著な摩耗が認められる資料は表裏が同様の状況になっているとともに、2, 3, 12のような細身の形態のものが多い。一方、表面の摩耗には光沢を帯びるもう1種類のパターンが認められ、大多数の資料がこのパターンに分類される。そしてこれも顕著な傾向であるが、こうした光沢を帯びた面は表裏のどちらかに限定されることがほとんどである。さらに、光沢を帯びた面と反対側には褐鉄鉱の付着が認められることが多い。褐鉄鉱は菊池(2001)による付着パターンの中の、器体全体に薄く付着する「モヤ様付着」、点状に付着する「ドット様付着」そしてやや厚く糊状に付着する「ベタ様付着」が認められる。この中で最も多いのは「ドット様付着」である。また、2, 3のような表裏両面が顕著に磨耗している資料には、表裏に「ドット様付着」が認められ、光沢を有する資料とは褐鉄鉱の付着のパターンにも違いが認められる。菊池(2001, p. 165)

を参照すると、このような褐鉄鉱の付着は、本遺跡が後背湿地や氾濫原、そして自然堤防など水の影響を被る環境であったことを示唆していると考えられる。本遺跡の形成過程を考える上でも非常に重要な情報といえる。

3-3-2 土器

当遺跡の土器は、初期鉄器時代～中世とオシボフカ文化期と考えられる土器片が出土している(図9・表4)。しかし、いずれも胴部の小破片と考えられ、出土点数も15点にすぎない。この内図化できた土器は、図9-1～5の5点のみであり、他10点については、小破片で遺存状態が悪いため図化不可能であった。

1は、無文の胴部片で、時期は不明である。内外面ともやや磨滅しているため、調整痕跡は明確でないが、外面はやや右下がりの丁寧なナデ、内面は接合時の凹凸がよく残されており、ヨコナデによる調整がなされている。

図9-2～3は初期鉄器時代ポリツェ文化期から中世のものと考えられる。

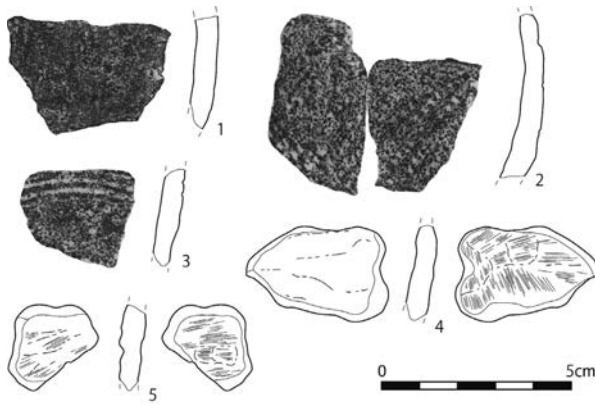


図9 出土土器

2は5単位2段の斜行の櫛歯スタンプ文が施文される。ポリツェ文化期の胴部であると考えられる。内外面ともやや磨滅しており、外面の文様や内面の調整痕跡は不明確であるが、接合痕跡は比較的良好に確認できる。

3は、3単位一組の曲線状の細沈線文が施文される。内外面とも磨滅している。特に内面はもとの器面は残らず、調整は不明である。

4と5は、胎土に混和される鉱物の特徴からオシポフカ文化期の土器と考えられる。いずれも内外面とも器面に混和された鉱物である角礫がよく浮き出ており、表裏器面や周縁ともに磨滅している。5の内面には凹凸がよく残る。4の内面にも凹凸がよく残るが、斜方向、横方向のナデ調整を確認することができる。

出土土器は、大別して上層から初期鉄器時代～中世、下層からオシポフカ文化期と考えられる破片が出土している。上層からの出土土器は文様も明確ではなく、また下層からの土器も細片であるため、細別時期の特定が困難であるが、出土土器の共通点を挙げると、1)内外面ともよく磨滅していること、2)炭化物の付着はなく、タール状にその痕跡が確認できることである。石器の観察所見と合わせて、土器も当地点における堆積環境の作用を大きく受けているものと考えられる。

4 考 察

2010年の調査成果から以下の指摘が可能である。

オシノヴァレーチカ12遺跡の第5層は褐鉄鉱を多く含んでいる。出土土器に付着した褐鉄鉱の存在からも

水の影響がある環境だったと考えられる。土器の遺存状態の悪さや石器の表面に残された摩耗などもこうした水の影響によって生じた可能性が高い。しかし、摩耗光沢の観察される石器の表面状態の観察から、石器の表面に残された摩耗光沢は表裏どちらかの面に限定されることがほとんどである。なおかつ摩耗の程度も、甲高の石器などやや突出した部位のある石器では、他の部分より突出部の摩耗の程度が大きいが、稜線が激しく磨滅するほどではない。石器が転がりまわるときの水の流れの影響は被っていないと解釈可能である。また、遺物の出土状況の所見でも述べたように、本遺跡の資料はおおむね土層の堆積に対して水平に出土している。こうしたことから、水の影響は遺物の分布を激しく擾乱するほどではなかったと考えておきたい。本遺跡には図7-2,3のような表裏が激しく摩耗している資料も存在しているが、これらは概してわずかな水流でも動きやすかったと考えられる相対的に幅の狭い資料がほとんどである。大多数の遺物には影響が少なかったと判断しておきたい。

本遺跡の形成過程における水の影響は土器などの遺存にはマイナスに作用した可能性があるが、遺物の擾乱という観点からは比較的影響は少なかったと想定することができる。また、本遺跡の周辺に所在するノヴォトロイツコエ遺跡群では、ゴンチャルカ1遺跡等で顕著に観察される氷楔（アイスウェッジ）が見られる（長沼ほか2003）。こうした周氷河性の擾乱の影響により、ノヴォトロイツコエ遺跡群では遺物の移動が生じやすい環境だった可能性がある。こうした状況の中で、今回発掘を行ったオシノヴァレーチカ12遺跡出土遺物は、相対的に良好なセット関係を保っているものと判断される。2002年に発掘調査が行われたオシノヴァレーチカ10遺跡（加藤・赤井2003）を含め、オシノヴァレーチカ遺跡群では氷楔は発見されていない。堆積環境や堆積時期など氷楔の影響を受けにくい条件が存在した可能性がある。地質学者などを交え、周辺遺跡を含めた堆積層の形成過程について検討を行う必要があるだろう。

本遺跡で用いられた石器石材については、礫面状態の観察から本遺跡で多用される暗灰色の頁岩には、円磨の進んでいない礫が多いことが明らかとなった。これらの石材は、現在遺跡近傍で採集可能な円磨の進んだ礫とは

表4 出土土器観察表

図番号	遺物番号	グリッド	時代・文化	文様	部位	調整		色調		
						外面	内面	外面	内面	断面
1	PL12・N001K	A-2	時期不明	無文	胴部	丁寧なナデ	ヨコナデ	10YR3/1	10YR6/4	10YR5/4
2	PL12・N002K, PL13・N001K	B-1	初期鉄器(ポリツェ?) ~中世	斜行櫛歯文	胴部	ナデ	ナデ	2.5Y4/1	7.5YR4/3(上), 10YR5/1(下)	10YR4/1
3	PL12・N003K	B-2	初期鉄器(ポリツェ?) ~中世	沈線文	胴部	不明	不明	10YR3/1	5YR6/1	5YR5/6, 10YR3/1
4	PL16・N001K	A-3	オシポフカ文化	無文	胴部	不明	ナデ	7.5YR6/6	2.5Y4/1	7.5YR6/6, 2.5Y4/1
5	PL16・N003K	B-3	オシポフカ文化	無文	胴部	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR6/4	7.5YR7/6	10YR3/1

図番号	焼成	胎土	付着炭化物	被熱痕跡
1	やや良好	砂粒多。0.1~0.3 cm の白色砂粒ごく多。0.1 cm の赤色砂粒と石英少量。	内面にタール状に付着。	外面全面
2	やや良好	砂粒多。0.1 cm 以下の淡褐色砂粒ごく多。0.1 cm の白色砂粒多。0.1 cm 以下の雲母少量。	外面に少量付着。	—
3	やや良好	砂粒多。0.1 cm 以下の淡褐色砂粒多。0.1 cm の白色砂粒多。0.1 cm の雲母少量。	外面に一部タール状に付着。	—
4	不良	角礫多。0.1~0.4 cm の白透明色角礫。0.1 cm の淡褐色砂粒と0.3 cm の白色砂粒少量。	なし	—
5	不良	角礫多。0.1~0.3 cm の白透明色角礫多。	なし	—

礫面の特徴が異なっている。一方、本遺跡に残された上記以外の石材は、小形亜円礫(5 cm 前後~それ以下)が用いられている。これらの石材は現在でも遺跡近傍で採集可能である。本遺跡から出土した石器石材の大部分は、遺跡の直近で採集されたものではないと考えられる。

オシノヴァヤレーチカ 12 遺跡の石器器種組成と出土剥片の特徴から、両面調整の石器が本遺跡で製作されていたことが推定できる。この点は、周辺のオシポフカ文化期遺跡と共通している。しかし、当該期遺跡にほぼ共通して認められる細石刃関連資料が見つからない点が大きく異なっている。ただし、本年度の調査面積はごく小規模に留まっており、細石刃関連資料の不在について、細石刃を伴わない器種組成のグループが存在するのか、それとも今回の調査地点が単に細石刃石器群の分布範囲の外だったのか、判断は難しい。さらに、本遺跡には細石刃石器群が伴わないとした場合にも、そうした編年上の段階が存在すると解釈するのか、あるいは本遺跡で行われた活動が細石刃を必要としなかったため生じた現象と考えるのか。現段階での判断は困難である。ただ

し、本遺跡は比較的擾乱の影響が少なかったと想定されることから、今後の調査でも細石刃に関連する資料が出土しなかった場合、より確実性の高い形で細石刃を伴わないオシポフカ文化期の遺物セットを提示できる可能性がある。

5 おわりに

今回実施した発掘調査と出土資料の検討によって、オシノヴァヤレーチカ 12 遺跡出土遺物の概要と、堆積環境や遺物の分布パターン、さらに遺物の遺存状態など、遺跡形成過程について評価するために必要となるデータについて、一部ではあるが提示することができた。加えて、石器石材についての検討や石器製作の復元にかかわるデータを検討した。これにより、当該期遺跡で行われた石器にかかわる人類行動について分析を実施する際に必要となるデータの基礎的な整備を行うことができた。

しかし、今回発掘調査を行ったのは6 m²というわずかな面積に過ぎない。小規模発掘による情報の精査によ

て、今回提示した種々の情報を提示できことは事実である。しかし、本研究の最終的な目的である当該期における人類行動の考察を行うためには、分析事例の追加も同時に進めていく必要がある。さらに、それだけでなくこうした考察のために必要となる分析の方法自体についても、新たな手法の導入と洗練を続けていく必要がある。

本年度の調査は、今後の継続的な調査遂行に向けた試行的な取り組みでもあった。そのため、次年度以降の調査ではオシノヴァレーチカ 12 遺跡のみでなく、さらに対象を広げた上で、人類の行動推定のための分析を継続していく予定である。加えて、遺跡の形成過程の復元や石器石材の調査などのためには地質学、岩石学などといった現在の研究チーム構成員だけではカバーできない専門知識が必要となってくる。こうした、今後必要となる研究体制の構築も重要な課題であると考えている。

謝 辞

本論は、橋詰の 2010 年度笹川科学研究助成と内田の 2009 年度日露青年交流事業若手研究者等フェローシップ《日本人研究者》の支援による成果の一部である。また石器石材の観察には、N.I. グロデコバ記念ハバロフスク州立郷土誌博物館自然部門のヴォリス・ニカライヴィッチ氏から多くのご教示を得た。また野外調査および資料整理では以下の諸先生、諸氏からもご協力、ご指導をいただいた。記して感謝いたします。

会田進、今井千穂、加藤博文、國木田大、N.N. クラージン、佐藤宏之、田口洋美、長沼正樹、福田正宏（五十音順・敬称略）。

注

- 1) Shevkomud は、2008 年度に自身が調査したノヴォトロイツコエ 17 遺跡において、ノヴォトロイツコエ 10 遺跡と同様の不整形な住居状遺構を確認している。今後同様な遺構の類例が、当遺跡周辺において検出される可能性は高い。
- 2) 管玉や男根状石製品などの象徴的遺物については、遺跡内での共伴に問題が残される（小畑 2003・2004、長沼 2004）。当該地域は土層堆積が薄く、後世の土地利用による攪乱が大きいと、本来的にはオシポフカ文化とは異なる時期のものが含まれている可能性がある。これは象徴的遺物だけの問題ではなく、一遺跡内における人工遺物の組成や共伴性にも及ぶ問題であり、当該地域で研究を進める上での重要な課題の一つである。
- 3) 2011 年現在までに、オシポフカ文化期の遺跡は約 70 箇所確認されている。そのおよそ 8 割がヘハツィル・ゲオアルヘオロギー地区に存在している（Шевкомуд and Яншина 2010）。

- 4) ただし、標高については基準となるベンチマーク等を遺跡周辺で確認することができず、また現アムール河の水面を基準とした原点移動も困難であったため、発掘区の B-0 杭を仮のベンチマークに定め、この仮ベンチマークを原点 = 0 m とし、原点からの比高差を算出し、遺物の取り上げを行った。
- 5) 図 5～図 8 の石器実測図には通し番号を付してある。そのため以下では、図 5、図 6 などの図版番号は省略し、個々の石器に付された通し番号によって説明を行う
- 6) 実測図の説明の際に用いる実測図各面の配置法と呼称は田中（2004）に従い、基本的に左右に 3 面を配している場合は左から正面、右側面、裏面を配置している。ただし、10、13 と 15 は左から左側面、正面、裏面を、19 は正面の上に上面を、20 は上から上面、正面、下面を配置し正面の右に右側面を配置している。
- 7) ここで取り扱うのは本遺跡出土石器の大部分を占める暗灰色の頁岩製の石器である。それ以外の石材には顕著な磨耗は認められない。両者の違いは顕著であるが、これは石材の緻密さや硬度の差に起因している可能性が高い。後者の石材の磨耗の発達の仕方は前者とは全く異なると想定されるため、今回の検討対象からは除外した。

引用文献

- Деревянко, А. П. 1983 *Палеолит Дальнего Востока и Кореи*. Новосибирск.
- Деревянко, А. П. и Медведев, В. Е. 1992 *Исследование поселения гася (общие сведения, предварительные результаты, 1975г.)*. Новосибирск. СО РАН.
- Деревянко, А. П. и Медведев, В. Е. 1993 *Исследование поселения гася (Предварительные Результаты, 1980г.)*. Новосибирск. СО РАН.
- 橋詰 潤・内田和典・I. Shevkomud, I.・長沼正樹・Gorshkov, M.・Kositsena S.・Bochkaryova E.・小野 昭 2011 「ロシア極東アムール川下流域における初期新石器時代の研究～オシノヴァレーチカ 12 遺跡の調査から～」『日本考古学協会第 77 回総会研究発表要旨』東京日本考古学協会（印刷中）
- 梶原 洋 1998 「なぜ人類は土器を使いはじめたのか 東北アジアの土器の起源」『科学』68-4：296-304 東京 岩波書店
- 加藤博文 2006 「アムールランドにおける新石器文化の成立過程——縄文文化の成立を考えるための比較資料として——」『東アジアにおける新石器文化と日本』Ⅲ：117-133 東京 國學院大學 21 世紀 COE プログラム研究センター
- 加藤博文・赤井文人 2003 「ハバロフスク州オシノバヤ・レーチカ 10 遺跡調査報告」『第 4 回 北アジア調査研究報告会』：11-14 北海道 北アジア調査研究報告会実行委員会
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1991 『図録・石器研究入門典（先石器）』：p. 302 東京 柏書房
- 菊池強一 2001 「石器の産状は何を語るか 検証の一步前進のために」『科学』71-2：160-165 東京 岩波書店

小畑弘己 2003 「シベリア・沿海州」『季刊考古学』83：80-84 東京 雄山閣

小畑弘己 2004 「シベリア・極東地域の初期土器研究について」『考古学ジャーナル』519：15-20 東京 ニューサイエンス社

黒龍江省博物館 1972 「黒龍江省饒河市小南山遺址試掘簡報」『考古』1972-2：32-34 北京 科学出版社

栗島義明 1999 「神子柴文化の系統問題——ニーナ論文に寄せて——」『土曜考古』23：157-170 埼玉 土曜考古学研究会

Kuzmin, Y. V., Shevkomud, I. Y. 2003 The Paleolithic-Neolithic cultural complexes from The Russian Far East. *Journal of East Asian Archaeology*. 3: 3-4. 227-253. Leiden. Society for East Asian Archaeology.

Малявин, А. В., Шевкомуд, И. Я. 1999 Предварительное сообщение об исследованиях новых стоянок с древнейшей керамикой в приамурье: Гончарка-3 и Новотроицкое-3. *Project Amur*. 36-53. Tsukuba.

Медведев, В. Е. 1995 К проблеме начального и раннего неолита на Нижнем Амуре. *Обзорные результаты полевых и лабораторных исследований археологов, этнографов и антропологов Сибири и Дальнего Востока в 1993 г.* 228-237. Новосибирск. ИИАиЭ СО РАН.

長沼正樹 2004 「アムール下流の土器出現期」『東アジアにおける新石器文化と日本』I：129-139 東京 國學院大學 21世紀 COE プログラム

長沼正樹・I. Ya. シェフコムード・工藤雄一郎・S. F. コスチナ・松本 拓・M. V. ガルシコフ・橋詰 潤 2003 「ゴンチャルカ 1 遺跡 2001 年発掘調査の概要とその諸問題」『旧石器考古学』64：73-82 京都 旧石器文化談話会

長沼正樹・I. Ya. Shevkomud・M. V. Gorshkov・S. F. Kositsyna・村上 昇・松本 拓 2005 「ノヴォトロイツコエ 10 遺跡発掘調査概報」『北海道旧石器文化研究』：117-124 北海道 北海道旧石器文化研究会

Окладников, А. П., Деревянко, А. П. 1973 Далекое прошлое Приморья и Приамурья. Владивосток. ДКЕ.

Окладников, А. П. 1980 О работах археологического отряда амурской комплексной экспедиции в низовьях амурита летом 1935 г. *Источники по археологии Северной Азии (1935-1976 гг.)*. 3-52. Новосибирск. Наука.

Лапшина, З. С. 1999 *Древности озера Хумми*. Хабаровск. ПГУ.

シェフカムート=イーゴリ=ヤコブレビッチ (梶原 洋訳・解説) 1997 「極東・沿海州の土器の起源——ゴンチャルカ 1 遺跡の発掘調査——」『考古学研究』44-3：102-117 岡山 考古学研究会

Шевкомуд, И. Я. 1996 Об открытиях древнейших погребений и некоторых проблемах осповской культуры (Приамурье). *Новейшие археологические и этнографические и открытия в Сибири*. 253-256. Новосибирск. ИИАиЭ СО РАН.

Шевкомуд, И. Я., Чернок, А. В., Кузьмин, Я. В. 2001 Стратиграфия, хронология, палеогеографическая реконструкция

обстановки финального плейстоцена-голоцена Хехцирского георхеологического района в Приамурье. Четвертинные отложения юга Дальнего Востока и сопредельных территорий. М-ды шестого Дальневосточного регионального межведомственного стратиграфического совещания. Хабаровск.

Шевкомуд, И. Я., Хирофуми Като 2002 Верхнепалеолитический комплекс стоянки Гольный мыс-4 (Нижний амур). *Археология и культурная антропология Дальнего Востока и Центральной Азии*. 14-25. Владивосток. ДВО РАН.

Шевкомуд, И. Я. 2002 Памятники Хехцирского георхеологического района и проблемы переходного периода от палеолита к неолиту в Приамурье. История и культура Востока Азии. Новосибирск.

Шевкомуд, И. Я. 2003 Осиновая Речка-10 — новый памятник переходного периода от палеолита к неолиту на Нижнем Амуре. *Археология и социокультурная антропология Дальнего Востока и сопредельных территорий*. 63-70. БГПУ. Благовещенск.

Шевкомуд, И. Я. 2004 Предварительные результаты полевых исследований стоянки Осиновая Речка-16 (Приамурье). Четвертые Гродековские чтения. 194-197. ХККМ. Хабаровск.

Шевкомуд, И. Я., Кузьмин, Я. В. 2009 Хронология каменного века Нижнего Приамурья (Дальний Восток России). *Культурная хронология и другие проблемы в исследованиях древностей Востока Азии*. 7-46. Хабаровск. ХККМ.

Шевкомуд, И. Я., Яншина, О. В. 2010 От палеолита к неолиту в Приамурье: обзор основных комплексов и некоторые проблемы. *Приоткрывая завесу тысячелетий: к 80-летию Жанны Васильевны Андреевой*. 50-72. Владивосток. ДВО РАН.

田中英司 2004 『石器実測法——情報を描く技術——』p. 87 東京 雄山閣

山田しょう・志村宗昭 1989 「石器の破壊力学(2)」『旧石器考古学』39：15-30 京都 旧石器文化談話会

ロシア語文献略号

БГПУ: Благовещенского государственного педагогического университета

ДВО РАН: Дальневосточное отделение Российской Академии наук

ДКЕ: Дальневосточное книжное издательство

ДУ: Дальневост. университета.

ИИАиЭ СО РАН: Институт археологии и этнографии Сибирского отделения Российской Академии наук

ПГУ: Приамурское географическое Университета

ХККМ: Хабаровский краевой краеведческий музей им. Н. И. Гродекова

(2011年2月25日受付/2011年2月27日受理)

Emergence period of pottery in the lower Amur River Basin, Russia (1):

Preliminary report of the excavation
at Oshinovaya rechika 12 site in 2010

Jun Hashizume, Kazunori Uchida
Igor Y. Shevkomud, Maxim V. Gorshikov
Svetlana F. Kositsyna, Ekaterina A. Bochkaryova
Akira Ono

Abstract

The Osipovka culture complex contains some of the earliest pottery discovered anywhere in the world. Not only that, Oshipovka culture complex is an important case study of the relationship between environmental change and human behavior in the transition period from Pleistocene to Holocene. The goal of the study is to examine human behavior as determined from the Oshipovka culture complex. The purpose of this paper is to report on the results of our investigation so far in this area.

Since 2010 new excavations have been carried out at the Oshinovaya rechika 12 site by a joint Russian-Japanese research team. This site is located on the terrace near the confluence of the Ussuri and Amur Rivers in Far East Russia. The excavation revealed six layers. Layer 4 to the top of layer 5 holds the artifacts of Oshipovka culture complex. Pottery fragments and more than 300 lithic tools have been excavated including bifacial points, various type scrapers, ax-shaped tools, unifacial tools and flakes. Microblade and microcore has not been excavated at this site.

This new research expands the scope of information about site formation process and lithics reduction process of the Oshipovka culture. These issues require further study.

Keywords: lower Amur River Basin, Osipovka culture complex, Pleistocene-Holocene transition, Oshinovaya rechika 12 site